DENSHO
伝書

ミシガン大学
日本研究センター

2004年秋

所長ご挨拶

CJSのスタッフ（後列左から）：ジュリー・ワインダー、マーク・ウエスト、ジェーン・オザニッチ、サンドラ・モラスキー、（前列左から）：G・P・ウィットビン、深澤ゆり

今季号のこのコラムをしたためる中、私はスキャンダルに巻き込まれています。虚言、センセーショナリズム、姦通、詐欺*の真っ只中です。いやいや、CJSのことではありません。書籍プロジェクトのことなのです。実は私は、日本およびアメリカのスキャンダルの制度的因果関係と相関関係の研究にここ2、3ヶ月を費やしています。今号のコラムをこの話から始めたのは、何も本の売り上げを伸ばすためではなく（とはいえ、2年先に皆さんが書店でこの本を探してくれても一向に文句はありません）、この経験がCJSの長所の一つをよく表しているからです。

このプロジェクトを始めた時、私はやや条件不足でした。私は日本の何件かのスキャンダルにおいて弁護士として仕事をした経験があり、それに関連する企業問題について多少書いたことがあり、週刊タブロイド誌やテレビのワイドショーに夢中、という程度でした。そこで、このプロジェクトを自分の経験や自分の専門分野の文献よりも幅広いものにしたいと願い、プロジェクトもまだ早い時期にCJSの同僚に助けを求めました。

私は、数名の同僚に問い合わせをぶつけました。つまり、映画関係は**阿部マーク・ソーネス**、文学関係は**ケン・イトウ**、私が点で弱い政治学は**ジョン・キャンベル**、歴史関係のちょっとした点は**レズリー・ピンカス**、人類学者的視点については**ジェニファー・ロバートソン**、といった具合でした。そしてこれらの人々の各々から素晴らしい手がかりをつかむことができました。中には、法学教授の馬鹿げた取るに足りない質問に対してはるかに必要以上の努力を払ってくれた人もいました。彼らの助けがなければ、私は間違いなくのろのろと自力で車輪を回していたでしょう。（そしておそらく空回りを繰り返していたでしょう。）

もちろんのことながら、CJSは日本研究の世界的権威が本拠地としているところです。しかし、CJSをこれほど特別で活気のある場所にしているのは、その専門知識だけでなく、同僚同士の協力関係、異分野間にまたがるインタラクション、コラボレーション、助け合いが存在することなのです。私は、傑出した仕事をする人々と共に教員でいることを誇りにしていますが、彼らが傑出しているだけでなく時間を割いて意見や洞察を非常に寛大に分け与えてくれる人々であることをさらに誇りに思っています。日本研究に純粋に興味のある学生にとって、彼らに勝る教員グループが存在することなど、想像だにできません。

秋期を開始するにあたり、CJSのスタッフと私は、新入生、在校生、教員をアン・アーバーに歓迎することを心待ちにしています。特にトヨタ招聘客員教授の**牟田和恵**さんには特別の歓迎を表明したく、CJSコミュニティの一員であると感じるようになっていただきたいと願っています。

所長
マーク・D・ウエスト（Mark D. West）

*エドワード・サイデンステッカーも巻き込まれています。第4ページの記事を参照ください。

出版会より

CJS出版会が移転しました

出版会と私のオフィスは、過去22年間にわたりコーナー・ハウス（Corner House, 202 S. Thayer Street）を本拠としてきました。この年月の間、大学がこの古くて白い建物を解体し私たちを追い出すという噂が出ては立ち消えるという状態が続いていました。1980年代後半、大学の中央事務局からやってきた大学役員が建物の中を何度も巡回したことがあり、建物内で働いていた私たちは全員、いよいよ引越しの時が来た、と覚悟していました。大勢の人々が建物を「検査」した後の夏のあるけだるい日、私は、ちょっと面白いことをやってやろうと決めました。私は、当時のCJSアドミニストレーターに電話をし、建物が2日内に取り壊される予定であると聞いたところだが、と彼女に伝えました。「それで私たちはどこに行くんです？」と私は彼女に聞きました。彼女が確かめてみる、と言ったので、私は、気の効いた悪ふざけを成功させた、と思いました。しかし、悦に入っていたのは、後で、別のことについて彼女に再度電話し、彼女に「あのことについてはここでは何も調べがつかなかったので、副学長の事務所に電話をしてありますから」と言われるまでのことでした。冗

第13ページに続く

CJS出版会の元本拠、コーナー・ハウス

目次

お別れのことば 2

図書館司書より 2

長く暑い夏 4

センター催し物 6

これまでの催し物 7

教員・アソシエート短信 8

学生・卒業生短信 9

教員・学生へのサポート 10

お知らせ 12

カレンダー 14

図書館司書より

拡張の一途をたどるアジア図書館

2003年にアジア図書館の館長が引退して以来、カルバン・許（シュウ）、林明英（リン・メイイン）、そして私の三人で図書館を運営し、館長代理としての役割を担ってきました。去る3月、シュウ氏が共同館長の職から退くことを決めて以来、リンさんと私が二人でアジア図書館全体を監督しています。当図書館のシステムには、まだなお、アジア図書館館長と日本語資料分類司書の二つの空席があります。私たち二人は、この空席によって当然生じる仕事量の増大にもかかわらず、全図書館サービスに不備のないように最善を尽くしています。

昨年、当会計年度のための北米図書館日本文献協議会（NCC）の大型セット蒐集プロジェクト補助金（MVS補助金）を受け取りました。これは、コンテスト用に私が選別したタイトルがNCCの委員会でふるいにかけられ、最終的に残った各図書館の希望タイトルに対して専門司書と教員による共同文書の審査で決定されます。今回は、ピンカス教授とズウィッカー先生の助力を受け、達成されました。この補助金は、去る3月にサンディエゴで開催されたアジア学会（AAS）の年次総会において公式に発表されました。幸いなことに、私たちは今回もまた、四つのうち三つの要請案に対して資金を受けました。それらは、『営業報告書集成』の金融および運輸シリーズの中のものです。このセットは、合計161リールのマイクロフィルムから構成され、金額にして2,121,600円となります。私は、政治学とビジネス経済学において最も人気の高い分野であるこの二つの主題（金融と運輸）を選択しました。これからは、学者ならびに研究者は、ここミシガン大学またはシカゴの中央研究図書館で入手できるものを利用して両分野の研究をアメリカ国内で実施できるようになります。私としては、MVS補助金に支えられることによってこのシリーズの出版の終了まで購入を継続できることを、個人的に願っています。

今年の1月から6月末までは、日本語文献の収集強化に極力集中するべく努力しました。CJKの新規購入作品を掲載する図書館のホームページは、利用者の皆さんにとって有用な情報となるように、毎週更新され、さらにCJSのウェブサイトにリンクしています。新規購入した書物の一部の表題は、以下のとおりです。

『松前健著作集』（全13巻）、『源氏物語別本集成』（全15巻）、『東山魁夷全作品集』（全1巻）、『作家の自伝、五期および六期』（全30巻）、『政治家人名資料事典』（全5巻）、『文学者人名資料事典』（全5巻）、『女子文壇』（第31巻―第35巻）、『風雅和歌集全註釋』（全3巻）、『官報目次総覧：平成編1』（全3巻）、『近代日本キリスト教名著選集、第IV期』（全9巻）、『仏教図像聚成』（全2巻）、『新聞広告総覧』（全9巻）、『大塩平八郎書簡の研究』（全3巻）、『幕府役職武鑑偏年集成』（全6巻）、『アメリカ合衆国対日政策文書集成、第13期』（全10巻）。

上記はほんの一部を列挙したまでです。最近の購入作品に関する詳細につきましては、当図書館までご連絡ください。

アジア図書館日本部部長
仁木賢司

トヨタ招聘客員教授より

お別れのことば

ラインハルト・ツェルナー、2003―2004年トヨタ招聘客員教授

ミシガン大学の図書館の息を飲むほどの豊かさの中を探索している最中、私は、20数年前に大学生であった時に深く感銘した引用文に遭遇しました。その当時、私はアウグスティヌス（354―430年）の教育的思想に関する論文を書いていました。アウグスティヌスは、彼の『神の都』の第VII章の中で、「然るに、人々が言語が異なるという理由だけで互いに意思疎通し合えないと感じる時、全ての人類は同類の性質を共有するという事実は社会的交流にとって無意味となる。ちょうど、赤の他人と一緒にいるよりも自分の犬と一緒にいる方を好むように。」（私がラテン語を英訳しました。）

当時、引用の技術においては駆け出しであった私は、その言葉の出所を書き留めておくことを忘れたので、今頃ようやく再び追跡調査ができたことになりました。良い引用文は、良い友達によく似ています。再び会った時、既に四半世紀経っていても、やはり気に入っていることに変わりはありません。私は、この引用文が好きです。人間の生活の基本的な事実を思い出させてくれるからです。言語と言葉は、意思伝達と共有の手段であるだけでなく、私たちを他の者から隔てることができ、極端な場合には自分たちの言語を話さない者を非人間的に扱うことをも許します。ギリシャ語の単語の「バルバロス（barbaros）」は、文字どおり、「バー、バー」、「ブラー、ブラー」としか話せない人を意味しました。したがって、言語を話さない（理解され得ない）と思われる人々すなわち文明の敵とされたのです。日本においては、この発想は、天皇即位儀礼の一部として、「アヤ（漢＝当て字）」と「ハタ（秦＝当て字）」と呼ばれる長らく忘れ去られた人々の代表が宮廷で犬のように吠えることに表現されています。「アヤ」と「ハタ」は当初は両方ともアジア大陸からの移民でしたが、原住民の目から見ると、彼らの言語が彼らを人間の文明から分け隔てたのでした。

異言語および異文化の間の壁が時にはほとんど克服不可能とも見えることを考慮するに、ヨーロッパの文化科学が、長年にわたり言語を人間の活動を理解する究極的な鍵と見なしてそれに焦点を当ててきたことは、さほど不思議ではありません。この先入観がもたらした成果の一つは、（哲学的・構造主義的）解釈学、すなわち古代の「痕跡」（ディルタイ）が真に理解され我々自身の言語（世界）において復活できるように解釈する芸術と科学です。もう一つの成果は、言語学（文献学）でした。これは、言語、歴史、およびその他「他を構成する」方法を組み合わせた外国文化に対する複合アプローチです。このことは究極的には、文化と搾取の二重の過程において意味そのものの発明と強制をもたらしました。したがって、この言語学的アプローチは、オリエンタリズムとしてブランド化され、西洋の帝国主義の一面に属する他のものと一緒に廃絶されることになりました。

この批判の大半は真実であるものの、言語学（文献学）は当初は帝国主義的プロジェクトの一部となることを意図したものではなかったことを私たちは忘れてはなりません。例えば、ドイツ語圏で最初の日本言語学の学者であったアウグスト・フィッツマイヤー（1808—1887年）を参照してください。（トルコ語とアラビア語に加えて）日本語と中国語を独学で習得したこのオーストリア人は、近代文学より前の文学の翻訳を数多く行いましたが、自分の知識を実際的な目的に適用するという考えはなく、純粋科学という象牙の塔の中に住んでいました。彼は、彼の時代の事情にあまりに疎かったため、プロシアとフランスの間の最近の「大戦」のことを、輸入された中国語の新聞で初めて知ったほどでした。しかもそれは戦争が終わって2年後のことでした！

アジアに焦点を当てた言語学者の第二世代は、19世紀末、彼らの大半が植民地や国際入植地の事務局に勤めることになる人物にアジアの言語を教える目的のためのみに雇用されたことから、植民地の科学にはるかに深く関与するようになりました。さらに第三世代の多くは、まさしくそうした理由で言語を習得したため、あからさまな帝国主義者になりました。彼らはつまり、言語を克服したからには今やその言語を話す人々のことも征服するべきである、と確信したのでした。第二次世界大戦後、この慢心に唯一残されたものは語学力だけとなり、彼らの多くは、今となっては政治的潜在性がより少ないように見受けられた近代以前の研究に集中する方がより安全である、と考えました。しかし、1970年代、これは、経済的「黄禍」に対抗する戦いには不適切であると見なされ始めました。人々が日本の特許の明細書を読みたがったので、現代語を教えることがすぐさま日本語学習過程の主要な焦点となりました。そして短期間のうちに、外国文化への普遍的アプローチとしての言語学は、言語学習を必ずしも必要としない分野研究に取って換わられました。したがって、言語学の学術は分解したかたちになりました。つまり、平安時代の和歌を流暢に読むことができる（でもそれ以外には何もできない）今なおも言語学の訓練を受けた少数の専門家、日本人の小学生とコミュニケーションがとれ地下鉄の切符がかろうじて判読できる（でもそれ以外には何もできない）程度の語学生、日本の統計年鑑（もちろん英語版）から誇らしげに引用できるその数も増えつつある分野専門家、といった具合に、です。

この状況の良いところは、彼らが日本について何もかも知っているというふりをする必要がなくなった、ということです。誰も（旧き良き時代にはパートナーのために原稿をタイプしてくれた、または黙って耐え忍んでくれた日本人の配偶者がいる人でさえも）、「日本文化」全体に「熟達」していると豪語できるわけがありません。誰も（それがなければまったくばかばかしい放送を習慣的にあなたに活気づけてもらいたがるラジオのパーソナリティ以外は）、もはやあなたのことを日本のすべてについての専門家であると期待などしてはいません。あなたの学生は、必要なこと（推薦状以外）はすべて、いずれにしてもウェブサイトから見つけます。

ところが、そうすると、日本の学者が（一部は先輩に奨励されて）出版する、そして洞察と訂正を必要とする、卓越した重要な著作物を、一体誰が読むのでしょう？もちろん、国際会議またはCJSのヌーン・レクチャーにおいて英語でのプレゼンテーションを行う若干の機会は常にあります。稀な場合には（大半は統計学と経済学の教科書のように見受けられますが）、翻訳が行われることさえあります。そしていつの日か、一部の西洋人が彼らの主題に関心を持ち、知的挑戦の意味を再発見してくれるかもしれません。他の言語で原文を理解することほどやりがいのあることは他にないからです。

ここで、私が地下鉄の切符のことを話しているのでないことは、明らかです。「原文」にはもちろん、映画あるいは絵画などの他の媒体も含まれます。ジャンルの制限およびその他ヘゲモニー的制約の外で、ある種の文化間言語学を開発しそれを適用することは、私たちが絶対的に行わなければならないことです。知的挑戦と成長の鍵は、差違の発見と、それに対処する決意です。

アン・アーバーのアジア図書館の本棚は、挑戦的な資料で満たされています。実際のところ、私は、ここより知的に刺激的な場所を他に思いつけません。おそらく、図書館の中で授業を行うこと、または教室内で学生を外国の書籍で取り囲むこと、（または学生に外国映画を字幕なしで見せること）は、良いアイディアでしょう。彼らは、最初は居心地悪く、また脅威さえ感じるかもしれませんが、次第に挑戦に対面するということを発見するでしょう。本物の価値を発見し、直接の経験を信頼するでしょう。翻訳をあてにすることなどありません。

このような直接的経験が、本当の知識人を生み出します。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトによると、大学は、教員と学生の両方にとって直接的経験の場所となるべきです。一見理解不可能に見受けられるものを理解する努力が文明の維持において必要不可欠な一歩であることを知っている専門家の誕生地となるべきなのです。

一年間のアン・アーバー滞在中に、私は幸いにも、数多くの発見をし、数多くの新しい挑戦に対面しました。それにもかかわらず、このアウグスティヌスの引用文の再発見は、私が家に持って帰れる最も貴重なものの一つとなることを、私は確信しています。人間の本質の研究についてはまだまだ初心者の私は、外国語（日本語など）の研究は、博愛を実践し共有する上での最初の一歩となり得る、と再確認しつつ、帰途につきます。

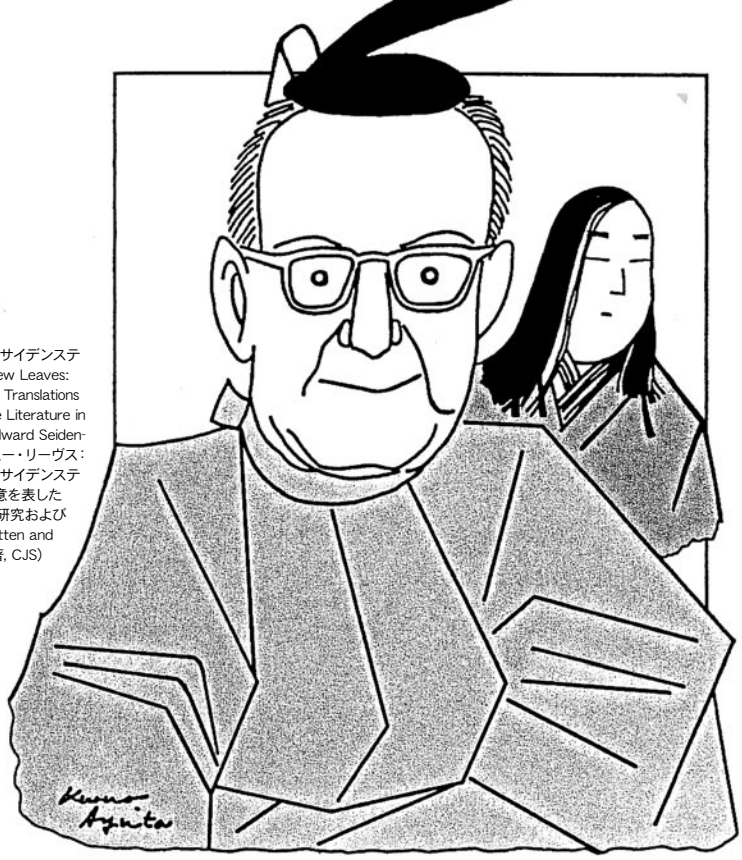
言語と言葉は、意思伝達と共有の手段であるだけでなく、私たちを他の者から隔てることができ、極端な場合には自分たちの言語を話さない者を非人間的に扱うことをも許します。

2003—2004年トヨタ招聘客員教授
ラインハルト・ツェルナー
(Reinhard Zollner)

ミシガン大学
日本研究センター

2004年秋

長く暑い夏



エドワード・サイデンステッカー。『New Leaves: Studies and Translations of Japanese Literature in Honor of Edward Seidensticker（ニュー・リーヴス：エドワード・サイデンステッカーに敬意を表した日本文学の研究および翻訳）』(Gatten and Chambers著, CJS)の表紙から。

慎み深く尊敬すべき伝統をその発祥の地に戻すことは、大いに喜ばしいことです。私はこの文章に諸先輩方が用いた表題をつけます。といっても編集者にとってこれを変更する理由は尽きることがないでしょうが。

おそらく最も重要なことに、まず、季節が間違っています。どの秋だか覚えていませんがもちろん私がミシガン大学にいた年月の秋であることは確かです、とにかく、ある秋、東京からアン・アーバーに戻った時、私は、レーン・ホール（Lane Hall）でのブラウン・バッグ・ランチで、私の日本での夏について話をするよう、招待を受けました。良い時も悪い時もある、他の夏よりも長くて暑い夏もある、というわけでこの題名がつき、そのまま年月が経ちました。このシリーズは、私がコロンビア大学にいた年月にも時折、そして私がホノルルに引退した時期にも幾分定期的に行われており、かれこれ長く続いています。その回数はもうすぐ20回になります。現在の場所はハワイ大学です。

私は、「土用」として知られる時期の最中に、これを執筆しています。7月後半にあたるこの時期は、普通に「盛夏」と翻訳されます。一年で最も暑い時期であるとされています。が、果たして本当にそうなのかな、と疑ったりしているのが私です。私は、1948年以来一度も欠かさずに日本で夏を過ごし、東京の大いなる夏を数多く経験していますが、8月の方が7月より酷い、と確信しています。日本全土の沿岸地域において夏は最悪の季節であること、関西の都市では東京よりも酷くなることは、まず疑いありません。人々はこう言います。私がかつて夏に来日していた理由はその季節にしか来られなかったからだというのは理解できたけど、どの季節にも来られるようになった今でも、なぜ夏にやって来るのですか、と。これに対する一番の回答は、私は習慣の動物だから、です。1948年に生まれた赤ん坊は、まもなく還暦を迎えます。昔の物の見方では、還暦を迎えた時点で余生が始まるらしいですけど。

ジャイアンツの選手はアメリカのメジャー・リーグに出て行き始めていますが、全員がそうすればいいのに、などと私は願っています。

あまりにも頻繁に繰り返された話を時折することは、ドライでおきまりのことに陥る危険性を含みます。私は、自分が同じ主題を何度も繰り返して取り上げていることをしっかり意識しています。しかし、それら主題のほとんどは重要なものであり、それほど重要でない主題も面白いものだ、と考えています。その面白い主題の一つに、野球があります。この話は通常、野球のシーズンの終わりに来ます。この原稿を書いている今、野球のシーズンはようやく半分終わったところです。でも、私は、野球のことに言及しないと、何となく喪失感を味わってしまいそうなのです。

私は、何と言うべきか、野球嫌いであるほどは、野球ファンではありません。好きな球団があるというよりは、嫌いな球団があります。日本の球団の中では、一番お金持ちで一番人気のある読売ジャイアンツのことを絶対的に毛嫌いしています。彼らは私が非常に嫌っていることそのものだからです。私は、過剰に人気のあるものは、それがたとえ野球の球団のようにつまらない実体であっても、いかなるものでも危険だと思います。ジャイアンツの人気は、日本人の群れ行動の傾向を示しています。私がこれを書いている時点では、野球はシーズン真っ最中で、ジャイアンツはそこそこの成績ですが、すこぶる好調というわけではありません。誰でも勝てそうな状況です。ジャイアンツの選手はアメリカのメジャー・リーグに出て行き始めていますが、全員がそうすればいいのに、などと私は願っています。彼らは私が嫌っているアメリカの特定の球団に加わるかもしれませんが、日本の野球シーズン中、乗るタクシー、行くバーのことごとくで毎晩毎晩、対面しなくて済むようになります。

野球をひとまず横におくと、対面すべきより重要な諸問題が存在します。いずれにしても多くの人々は、それらの方がより重要だと言います。例えば、経済の状態です。これに関しては、私は関心ある部外者として意見を述べます。私は、経済学者が行う不可解な表明をするような語彙を持ち合わせていませんから。

日本は果たして景気後退にあったのか否か、これに関して興味深い論議が続行しています。中には、知っているべき立場にある人々で、これは景気後退ではないと述べている人々がいます。私には、実際に景気後退が起こったことは明らかに思えます。景気後退がなかったと述べる人々は、日本の官僚に嘘をつかれることに慣れてしまっていて、官僚が言うことはすべて嘘だと推し量っているのではないか、と私は怪しんでいます。こういう人々は、官僚が私たちを油断させるために景気後退があったと言っているのだ、と思って話しているのではないか、と。

景気後退があったことに疑いの余地はない、と私が言う理由は、私の有産階級を支持する非常に強い偏重に基づきます。私は、有産階級を、上手く機能しているあらゆる民主主義の気骨である、と見なしています。私は、小規模企業のビジネスマンを特にえこひいきしています。大企業に圧倒的に支配されている国において小さな事業を起こすことには、非常な勇気を必要とします。零細企業を存続させるために死に物狂いで苦労し、その挙句に上手くいかずに手放してしまうのは、大変辛いことです。そしてまさしくそのような例を、私は数多く知っています。

昨年の自殺の数は、統計が始まって以来の他年度における数字を上回りました。断定された幾つかの理由のうち、増加率が最も高かったのは、経済的な理由と生計を起因とするものでした。それ以上の詳細は提供されていませんが、これらの事例の相当数は、小規模企業の元所有者であったことが容易に信じられます。私はですから、景気後退は「あった」ともの申します。

私には、ある非常に重要な米国の新聞から東京支局長職の申し出を受けた知人がいます。彼は辞退しました。そして、日本からは何のニュースも出てこないことを理由として挙げました。興味深いニュースが記載されているにもかかわらず日本の新聞は読まない方がましと思う人がいることは、真実でしょう。どんぐりの背比べにすぎない政党と汚職に関する話がほとんどなのですから。

相当たる汚職は常に存在し、しかもそれらは互いに非常に似通っています。違いは、おそらく、いかに有力なビジネスマンでも有力さゆえに有罪を免れることがもはやできなくなったことでしょう。三菱自動車の社長は今、牢屋に入っています。いわゆる長期休暇中です。彼は、特定の三菱車に関して刑法上の過失のかどで有罪判決を受けました。三菱は何年か前に、多々ある中でもとりわけ、奴隷労働のかどでも打撃を受けています。

新聞記者の関心を刺激するらしい他の問題は、私の心を刺激しません。何十年か前に北朝鮮に拉致され、最近本国に帰還し始めた日本人がいます。とりわけ、曽我さんという中年婦人と、彼女の夫および二人の娘です。彼女のことはかわいそうだと思うべきですが、それだからといって彼女が興味の持てる対象になるわけではありません。彼女のアメリカ人の夫の方がはるかに関心が持てます。彼は、40年ほど前に北朝鮮に脱走したと見受けられる（この件にはどうやら疑いもあるようです）のです。彼は、自分のしたことは何にしろ許されるべきだと考えています。じゃあ彼についてはもちろんそうしてあげればいいじゃないか、としか思い様がありません。

そして、皇室の方々がいます。とりわけ、皇太子妃と彼女の試練について、そして彼女の娘が皇位継承を許可されるべきかについてです。彼女が皇位を継げないまともな理由など私にはまったく思い当たりませんが、そもそも皇室などはない方がよい、と私は思っています。公共の資金には皇室よりはるかに適切な用途があるし、皇居の敷地は東京にとって見事に素晴らしいセントラル・パークになります。

私は、年に一度の夏についての話の中で、言語、そして特にカタカナの増殖について話すことが好きです。カタカナの増殖は私が常に嫌っていることです。カタカナは、最近は主に、英語からの輸入語に利用されています。英単語は、そのまま接収され、細かな断片に切り刻まれ、その断片は英語を話す者には摩訶不思議な形体に組み合わされます。時々、英語では現代的でない表現が、あたかも現代的であるかのように使われます。私にとっては、これらは皆、非常に耐えがたいことです。

私は、見出しや表題の意味を知るために関心の持てない記事を読むことに、時間をとられます。最近、ある文学雑誌に、私が賞賛していない評論家二名による対話が掲載されていました。表題のキーワードは「コア（koa）」でした。コアは、たまたま、ハワイ原産のアカシアの一種であり、木材として非常に重宝されている樹木の名称ですが、それだと文脈からかなりかけ離れているように思われました。そこで、しばらく本文を読んでみて、それが「コア（core）」であることを確かめたのでした。この対話からはまったく学ぶところがなく、ただそれだけのことでした。私は、フランス語を純粋で古典的なままに保てると思っているフランス人は馬鹿だと思いますが、カタカナの制御に単数、複数の対策がとられても不適切ではないとも思っています。

私は、国の将来について話すことも気に入っています。これは、新生児の誕生が人口の持続に充分でないために絶滅がどこかに潜んでいるように見受けられることから、どちらかというと暗い主題です。私は、若者について話すことが好きです。彼らは将来だからです。彼らが彼らの両親といかに異なるかについて人々が驚きの念を表すと、私はよくこう言ったものです。「あなたが自分の親御さんの年になるまでお待ちなさい。どういうことだか分かりますよ。」

今までのところは私が正しく、彼らは皆、彼らのご両親とまさしく同じような人々になっています。しかし私は現在、根本的な変化が発生しているのかもしれないという疑念（そして怖れ）を感じています。若者は、熱心さと私欲のなさを喪失しているのです。かつて、公園のベンチの横に座り、英会話の練習を始めてくる若者は、迷惑であったと同時にチャーミングでもありました。私のお気に入りは、自分のことを自己紹介し、「あなたの行くところに僕も行きたいです」と言った若者でした。

今や、若者は、学ぶべきことなど何もないと想定しているように見受けられます。感動しなくなり、世間に飽き飽きしています。そしてマナーをなくしてしまっています。私は長年の間、日本ではマナーつまり行儀作法は非常に重要なことだ、と説いてきました。行儀作法は道徳意識を代弁します。行儀作法がなくなり始めた時、家のドアに鍵をかけるようになるのです。

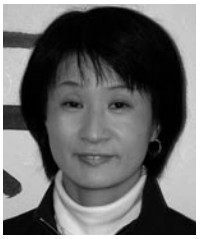
私が間違っている可能性、そして今日本で起きている変化は大規模かつ永久的な変化の例ではない可能性は、常にあります。その可能性が正しいことを望みます。でもそうは思えないのです。

エドワード・サイデンステッカー
(Edward Seidensticker)

英単語は、そのまま接収され、細かな断片に切り刻まれ、その断片は英語を話す者には摩訶不思議な形体に組み合わされます。

センター催し物

CJS、日本からの2004—2005年度トヨタ招聘客員教授二名を歓迎



牟田和恵、2004年秋期トヨタ招聘客員教授

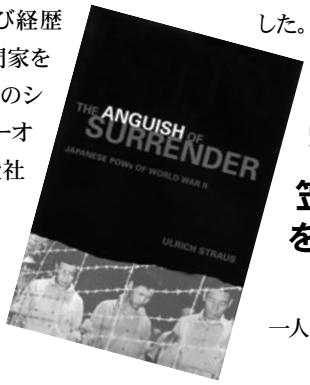
中生勝美、2005年冬期トヨタ招聘客員教授

日本研究センターは、9月15日、ソーシャルワークビル（School of Social Work Building）1階にて、2004年秋期トヨタ招聘客員教授である**牟田和恵**教授のレセプションを行いました。牟田教授は、大阪大学人間科学部教授です。秋学期の間、ミニ・コース『Women, Family, and Sexuality in Japan（日本における女性、家族、および性）』にて教鞭をとり、また、11月11日のヌーン・レクチャーで講演しました。

CJSは、1月には、2005年冬季トヨタ招聘客員教授である**中生勝美**教授をお迎えします。中生教授は、大阪市立大学の文学部助教授です。『Colonialism and Anthropology in Imperial Japan（大日本帝国における植民地主義と人類学）』ミニ・コースにて教鞭をとり、さらに、2月17日木曜日にヌーン・レクチャーを行います。

2004—2005年ヌーン・レクチャー・シリーズ

CJSのヌーン・レクチャー・シリーズは、多種多様の分野および経歴の学者ならびに専門家を講師に招きます。秋のシリーズには、セイコーオーストラリア取締役社長の**内藤昭男**氏、日本語教育専門家の全米第一人者であるミシガン州立大学のハドソン**遠藤睦子**氏、そして沖縄総領事、フィリピン担当ディレクター、国防大学教授を務めた**ウルリッ・ストラウス**氏などのスピーカーが含まれます。



ヌーン・レクチャー（11月4日）の講師、ウルリッ・ストラウスの著書。ユニバーシティ・オブ・ワシントン・プレスの許可により転用

2005年冬季のシリーズは、1月13日に始まり、カリフォルニア大学アーヴァイン校の東アジア言語・文学部の**ジェイムズ・フジイ**氏、ヴァンダービルト大学歴史学部の**ジェラルド・フィーガル**氏、そして我がミシガン大学の**ジェニファー・ロバートソン**氏などのスピーカーが含まれます。

ヌーン・レクチャーはすべて無料で、一般に公開されています。毎週木曜日の正午から午後1時まで、ソーシャルワークビル1636号室にて開催されます。軽食が用意されます。スピーカー全員のリストにつきましては、カレンダーを参照してください。表題リストの最新の更新につきましては、http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/noon.html をご覧ください。

秋の映画シリーズ

この秋、CJSの映画シリーズの呼び物は、溝口健二映画回顧祭でした。このシリーズは、**マイケル・レイン**（シカゴ大学の日本映画学助教授）ならびに同氏のシカゴ大学での映画シリーズとのコラボレーションによって実現しました。上映作品は、『残菊物語』（1939年）、『西鶴一代女』（1952年）、『雨月物語』（1953年）などです。

映画はすべて無料で、毎週金曜日に午後7時から、ローチ・ホール（Lorch Hall）のアスクウィズ・オーディトリアム（Askwith Auditorium）にて上映されました。詳細につきましては、CJSの映画のページ、http://www/umichi.edu/~iinet/cjs/events/film.html をご覧ください。

笠井叡、『花粉革命』を披露

舞踏家の笠井叡、『花粉革命』を踊る

日本でも最高に誉れ高い舞踏家の一人、**笠井叡**が、10月13日にミシガン大学キャンパスのパワー・センター（Power Center）にて、ソロ作品『花粉革命』のパフォーマンスを行いました。公演後には、ミシガン・リーグのヴァンデンバーグ・ルームでパブリック・レセプションが開かれました。

このパフォーマンスに伴い、CJSでは、10月11日に笠井氏との質疑応答（Q&A）会を催しました。この会は無料で一般に公開されました。その翌日の10月12日には、舞踏公開ワークショップが開催されました。このワークショップは笠井氏直接の指導によるものです。

アン・アーバー、『象の消滅』を歓迎

ユニバーシティ・ミュージカル・ソサエティ（UMS）は、10月20日から23日まで、四つの小作品から構成される『象の消滅』の上演を主催しました。日本人作家、**村上春樹**の短編からインスピレーションを得、**サイモン・マクバーニー**が監督の手腕を振るい、ロンドンを本拠とする劇団コンプリシテによりプロデュースされたこのプロダクションは、アン・アーバーでこの秋唯一の米国公演を行いました。

このイベントと同時に、CJSでは東洋大学の日本文学助教授である**マシュー・カール・ストレッカー**を招き、10月18日にアン・アーバー地区図書館のメイン・ブランチにて、『象の消滅』についての書籍討論会を開催しました。ストレッカー氏は、2002年にCJS出版会より『*Dances with Sheep: The Quest for Identity in the Fiction of Murakami Haruki*（羊とのダンス：村上春樹のフィクションにおけるアイデンティティの探求）』を出版しています。

イベント最新情報につきましては、http://www/umichi.edu/~iinet/cjs/events/calendar.html をご覧ください。

これまでの催し物

CJS、K-12コミュニティにアウトリーチ

退任するJTAM理事長のアニー・ホガート、着任するJTAM新理事長のフェイ・ヴァルタドロス2004年ジャパン・ボウルで

CJSは、**K-12**（小学校入学から高校卒業までの12年間）教育コミュニティに手を差し伸べる継続的努力の一環として、今回再び、ミシガン日本語教師協会（JTAM）のジャパン・ボウルを支援しました。日本語を学習する**K-12**生徒、彼らの教師、家族、および13名を超えるインストラクターと学生のための言語と文化のコンテストや文化的な展示会と活動から構成されるこのイベントは、今年(2004年)で11回目を迎えました。2004年のジャパン・ボウルは、3月6日にミシガン州立大学で開催され、CJSのプログラム・アソシエートである**ジェーン・オザニッチ**（ミシガン州大言語教育研究センターの元アソシエート・ディレクター）が4年連続で共同コーディネーションを行いました。CJSのアウトリーチ・コーディネーターである**G・P・ウィットビン**もこの終日のイベントに協力しました。なお、2005年ジャパン・ボウルは、CJSが組織、主催し、3月5日にミシガン大学のキャンパスで開催されます。

日本の社会階層を研究する会議

去る3月、日本の社会階層の課題をめぐりプレゼンテーションやパネル・ディスカッションにて積極的な交換をするため、日米両国から25名の学者がミシガン大学に招かれました。CJS客員研究員である**石田浩**教授と社会学者である**デイヴィッド・スレーター**（上智大学）の二人が、この変わりゆく課題を異なる視点と分野から調査する会議を共同計画しました（3月19日—20日開催）。

夏の映画シリーズ、山田洋次本人厳選の映画で構成

映画監督の**山田洋次**はおそらく、世界最長の映画シリーズである「寅さんシリーズ」で最もよく知られていることでしょう。最近では、2003年アカデミー賞候補作となった『たそがれ清兵衛』によって米国でもより知られるようになりました。この夏、CJSは、山田氏がCJSシリーズのために本人自ら厳選した何点かの山田作品を上映しました。これには、『なつかしい風来坊』（1966年）、『男はつらいよ』（1969年）、『故郷』（1972年）、『キネマの天地』（1986年）、『学校』（1993年）、『たそがれ清兵衛』（2002年）が含まれました。これらの映画は7月9日を初回として毎週金曜夜に上映され、8月13日に終了しました。上映はいつもどおり、ミシガン大学のローチ・ホールのアスクウィズ・オーディトリアムで行われ、無料で一般に公開されました。このシリーズは、米国教育省からのタイトルVI（高等教育法第VI篇）助成金、松竹株式会社、エンパイア・ピクチャーズの援助によって実現しました。

CJSの2004年夏の映画シリーズ

ルース・キャンベル（社会福祉学）老年学と社会福祉学における長年の先駆的研究により、ミシガン大学ヘルス・システムの社会福祉学部からミシガン大学特別功労賞（Lifetime Achievement Award）を受賞しました。

マリー・ギャラガー（政治学）「The Rule of Law in China: If They Build it, Who Will Come?（中国の法律の原則：それを作れば誰が来るのか？）」と題するプロジェクトを指導するために、全米科学財団（NSF）から助成金を受理しました。この受賞金は2004年3月に発効し、2005年2月28日に失効します。

近藤純子（アジア言語文化学）2004年4月に開催された第4回日本語実用言語学国際学会にて『無助詞の主題、主語、目的語』と題した論文を共同発表しました。また、論文、『An Analysis of Japanese Learners' Oral Narratives: Linguistic Features Affecting Comprehensibility（日本語学習者の会話の分析：理解性に影響を与える言語学的特徴）』が2004年夏に『世界の日本語教育』誌上に発表されました。

ウィリアム・マルム（音楽名誉教授）2004年6月、ポーランドはワルシャワで日本の音楽について講演しました。さらに8月、同じ主題について、ヘンリー・ルース基金のためにプリンストン大学でプレゼンテーションを行いました。12月にはワシントンD.C.のフォリン・サービス・インスティテューツでも講演しました。

岡まゆみ（アジア言語文化学）「日本語教育学コース」と表したゲスト講義シリーズを計画実施しました。この講義シリーズは、2004年6月3日から7月8日まで、ミシガン州ファーミントンのデトロイト日本人会（JSD）で公開されました。

さらに、共同編集者パネルと協力し、『*New Development in Language Education: The World of Japanese*（言語教育における新しい進展：日本語の世界）』（岡まゆみ他編集）エッセイ集を編集しています。この画期的な一冊には、言語学、言語教授法、第二言語取得、継承語学習、OPI（会話能力テスト）の各分野の専門家によるエッセイが収集されています。現在、この書物は印刷中で、東京のひつじ書房から発売される予定です。

また、共同編集書の『*Can Metaphors Build a Bridge Between Literature and Language? Tapping into the Power of Metaphors in Japanese Classes*（隠喩は文学と言語の間に橋をかけられるか？日本の階層における隠喩の力を探る）』（ひつじ書房）の中の一章を執筆しました。

ジェニファー・ロバートソン（人類学）『*Same-Sex Cultures and Sexualities: An Anthropological Reader*（同性文化と性：人類学読本）』（Blackwell Publishers、2004年8月）と題される新刊書を編集しました。また、過去および現在の日本の文化および社会の誤解を招く陳腐なステレオタイプを退かせることを試みた著書『*A Companion to the Anthropology of Japan*（日本の人類学の手引書）』が2005年1月に発売される予定です。現在は、日本の植民地主義の文化的経験、規模、および戦略についての書籍『*Blood and Beauty: Eugenic Modernity and Empire in Japan*（血と美：日本の優生学的近代性と帝国）』の原稿を執筆中です。

著書の他、論文を幾つか発表しており、講演およびプレゼンテーションに多数の招待を受けています。例えば、2003年2月にはデューク大学で「Out and Outspoken in Life and Love: Yoshiya Nobuko and Girl's Culture in Japan（現れ出て命と愛を率直に語って：吉屋信子と日本の少女文化）」と題した講義を行いました。その後同じく2月、第9回つくば国際生命倫理学会円卓会議と同時に開催された第5回アジア生命倫理学会議では「Eugenics, War, and History: Demystifying 'East Asian' Bioethics（優生学、戦争、歴史：「東アジア」生命倫理学の神秘を剥ぐ）」と題する講義を行いました。さらに2004年10月には、ハイデルベルグ大学でも講演しました。

過去1年間に三つの助成金を付与されました。一つは、今学年度用に新しい選択科目「Genes, Genealogies, Identities: Anthropological Perspectives（遺伝子、血統、個性：人類学的見解）」を開発するためのミシガン大科目開発助成金です。このコースは、医療人類学副専攻／認定の中枢2教科のうちの一つです。さらに、日本の科学と衛生の大衆化を研究するために副学長から研究助成金を、また、優生学と日本の生命倫理学を研究するためにCJSからメンバー向け研究補助金を受理しています。

今年、ミシガン大の倫理審査委員会2004—6年）、生命科学運営委員会（2004年—）、医療人類学計画委員会（2004年—）の新メンバーに任命され、就任しました。

最後に、『Colonialisms（植民地主義）』（Book Series, University of California Press）、『Critical Asian Studies（アジア研究）』（Routledge）、『Image and Gender（イメージ&ジェンダー）』（Tokyo）、『Journal of the History of Sexuality（性の歴史ジャーナル）』（Chicago）の編集委員会メンバーも引き続き務めています。

鈴木雅恵（アジア言語文化学）2003年8月から2004年6月までデトロイト日本領事館で作品を展示しました。さらに、日本で二つの展示会を行いました。2004年3月に岐阜で行われたグループ展示会に参加し、7月には名古屋で個展を開きました。また、2004年6月4日から8月6日までは南イリノイ大学のユニバーシティ・センター・ギャラリーにも作品が展示されました。教科の仕事に関しては、2004年夏にCJS科目開発助成金を授与されました。

学生・卒業生短信

CJSは、以下の7名の新入生を日本研究修士課程に迎えました。

ジェニファー・アンドリュース ミシガン大学から日本語で学士号を、ケント州立大学から日本語翻訳で修士号を取得しました。日本のPR業界で6年間勤務した経験があります。さらに、作劇で幾つかの奨学金を受けました。現代日本語と文学の研究を続けていくことに関心を持っています。

シャン・チバス イリノイ州リッチモンドにあるアーラム大学から日本研究で学士号を取得しました。日本は盛岡市の上田中学校で教鞭をとったことがあります。合唱隊に関心があります。日本語翻訳家になることを希望しています。

ジョシュ・アイゼンマン ミシガン大学から歴史学で学士号を取得しました。日本は滋賀県で日本語を学びました。政府またはビジネス界の何れかで国際関係の専門家になることに関心があり、また、後には博士号取得を目指すことを希望しています。

ヘザー・リトルフィールド テキサス大学から日本語で学士号を取得しました。日本は南山大学で学んだこともあります。2年間にわたり、核化学と生物化学の分野の専門家として雇用されていました。日本の総合研究に関心を持っています。

ジョシュワ・マクブライド ペンシルベニア州立大学から日本語で学士号を取得し、日本は仙台市で日本語を学びました。性病とその日本文化との関係の研究に関心を持っています。キャリアのゴールは、日本語の教授になること、翻訳・通訳者となることです。

ノリコ・ヤマグチ 日本出身です。ペンシルバニア州アレンタウンにあるシダー・クレスト大学から歴史学で学士号を取得しました。日本の戦後の歴史と法律の研究に関心があります。国際関係論またはアジアの法律学で博士号取得を目指す予定です。

リエン・ヨン 韓国出身です。ソウル市の梨花女子大学から政治学で修士号を取得しました。21世紀初期の東アジアにおける日本と中国に関する権力の構成を研究することに関心を持っています。教授または研究者になるために博士号の取得を目指すことを希望しています。

CJS卒業生・学生の最新情報

ヘンリー・アダムス（CJS 修士号2003年卒）宮崎市の宮崎県庁の国際交流員（CIR）に選出され、この秋に就任しました。日本への出発に先立っては、ワシントン州シアトル市の貨物発送会社に勤務していました。

趙秀美（チョ・スミ）（人類学）と金東柱（キム・ドンジュ）（人類学・歴史学）2004年5月15日、長男の金マクスウェル何珍（キム・ハジン）が誕生しました。

アニー・ホガート（CJS 修士号1995年卒）ミシガン州立大学において教育課程、教育指導、教育方針での博士号取得を目指しています。2003年秋には西日本で民族誌学フィールドワークを実施し、現在は、日本の中学校で進行中の総合学習をめぐる教育課程改革に関する教師の学習について卒業論文を執筆中です。2004年8月に、ミシガン州エイドリアンのシエナ・ハイツ大学に教師教育修士課程の助教授として就任しました。

ウィリアム・ロンド（歴史学博士号2004年卒）ペンシルベニア州ラトローブのセント・ヴィンセント大学で、テニュア・トラックのポジションに就任しました。さらに、ミッドウェスト・ジャパン・セミナーの執行委員会のメンバーに任命されました。また、ブリルから出版されるに密教に関する便覧に高野山の初期の歴史について論文を寄稿する予定です。

ジェイムズ・マンディバーグ（社会福祉学・組織心理学博士号2000年卒）新しい非営利組織法を鑑みた日本の社会的企業の発展の研究（「The Development of Social Enterprise in the Social Service Sector in Japan: An Exploratory and Analytic Study」（日本の社会サービス・セクターにおける社会的企業の発展：調査分析研究））のための社会科学研究評議会の安倍フェローシップを授与されました。ウィスコンシン大学マディソン校で助教授を務めています。

ジェシカ・モートン（CJS 修士号2002年卒）最近、教師としてのキャリアを追求するために住友商事での翻訳・通訳者の職から退きました。この秋から、天分豊かな8年生までを対象とした学校であるステッピングストーン・スクールで、日本語と日本文化を教え、放課後と週末の課目を開発しています。この秋はさらに、ワシュタノウ・コミュニティ・カレッジで初級日本語を教えています。また、センダント・モビリティ社でフリーランスの日本語インストラクター／文化トレーナーも務めています。

ラリー・ローゼンスワイグ（CJS修士号1975年卒）モリカミ美術館＆日本庭園（The Morikami Museum and Japanese Gardens）の館長としての過去27年間の功績が認められ、マイアミ市の小平日本総領事から「総領事賞」を受賞しました。同美術館は、2003年に米国博物館協会（AAM）から認可され、その庭園は、『*The Journal of Japanese Gardening*（ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング）』誌による日本国外の世界の日本庭園300選の第6位にランク入りしています。

客員研究員

中尾美知子 岩手県立大学の社会福祉学の教員で、昨夏から初秋にかけて、CJSの客員研究員でした。韓国の社会福祉および韓国の近代史を中心に研究しています。

山口智美 2003年にミシガン大学から人類学で博士号を取得しました。客員研究員としてCJSに滞在中は、日本の塾システムにより生み出される社会的関係と政治的関係の連結を探求する予定です。

日本研究センターはここに2004—2005年度教員向け研究補助金の受理者を発表します。個人またはグループのプロジェクトへの補助金は、日本の社会および文化の側面を調査する研究を支援する目的で提供されています。当年度の受理者および各自のプロジェクトの説明のリストは、以下のとおりです。

ジョン・キャンベル（政治学教授）2000年4月に設立された日本政府の強制加入介護保険制度である介護保険に関する書籍プロジェクトのための資金を受けました。2004年に本書の執筆に取り掛かり、2006年に予定されている制度大改革に関する情報が入手できるようになった後で完了する計画です。補助金は、日本での数回のフィールドワークならびにドイツ、イスラエル、オランダ、スウェーデン、デンマークへの短期調査旅行で収集した資料の整理に利用する予定です。

ルース・キャンベル（老年学センター社会福祉プログラムおよびコミュニティ・プログラム・アソシエート・ディレクター）介護保険制度の影響を調査する日米協働の取り組みであるプロジェクト「変化する日本の介護関係：介護保険の影響」のために補助金を受理しました。補助金は、参画した日本の被介護者および介護者のインタビューのオーディオテープを翻訳するために利用します。

メアリベス・グレービル（ミシガン大学美術館アジア美術学芸部長）二つのプロジェクト「日本の着物および20世紀の婦人服の研究」および「日本の役者版画の研究」に補助金を受けました。昨年、ミシガン大学美術館は、19世紀の女形を中心とした浮世絵を230点以上、および、昭和初期から平成時代までの婦人の伝統着（着物、羽織、道行コート、その他）約80点の、寄贈を受けました。美術館は、両収蔵作品の内部展示会を計画しています。展示会を準備する上でさらなる調査を実施するために補助金を利用する予定です。

ウィリアム・マルム（音楽名誉教授）プロジェクト「琵琶楽：ビデオ開発」のために資金を受けました。1990年以来、オクラホマ大学ミュージックTVセンターにより制作された日本音楽シリーズのために、雅楽、文楽、神道、長唄、能劇、尺八、琴の合計7本のビデオ・プロジェクトを完成しており、琵琶だけが未完成となっています。この補助金により、日本に出張し、琵琶楽に関する教育ビデオの内容に関して演奏者および学者に相談する予定です。

中野勉（企業戦略論・国際ビジネス論助教授）「アウトソーシングおよび工業地帯の小企業のグローバリゼーション：社会的ネットワークの分析からの見解」のために補助金を受けました。多国籍企業の戦略的アウトソーシングは急速に拡大しています。この研究の目的は、近年の機械製造技術の発達と相俟ったアウトソーシングが工業地帯の中小企業（SME）に与える影響を明確化することにあります。定性調査フィールドワークとして東京および京都に所在する日本の大手製造会社および中小企業とのインタビューを実施し、それと同時に、定量ネットワーク・データを収集、分析します。プロジェクトの一環として、経済社会学会の2004年度年次総会に出席し、京都でそのフォローアップ研究を実施します。

パトリシア・オリニック（美術・デザイン助教授、ペニー・W・スタンプス特別客員研究員プログラムおよびウィット客員教授プログラム・ディレクター）プロジェクト「庭：囚われた跡、（不）自然の空間」に補助金を受けました。このプロジェクトは、2003—2004年CJS教員向け研究補助金を受けて昨年開始した現在進行中の仕事「音庭」の拡張です。新プロジェクトの目的は、日本庭園自体の構造内部にある混成、変形、内部空間の隠喩としての外部空間、他性の概念を熟考することにあります。今回の補助金により、日本庭園の無数の様式に見られる複雑な視的パターン、感触、表面に焦点を当てた日本での文書記録と作品制作のフェーズが開始されます。

殿村ひとみ（歴史学準教授）プロジェクト「近代前の日本における出産：身体、血、力の重荷」のための資金を受理しました。この書籍プロジェクトは、妊婦の身体を推論の中心とし、出産の歴史を穢れ（汚れ）の枠組みという足枷から解放し、近代前の日本における出産に焦点を当てます。この補助金により、6ヶ月間の研究のための日本滞在が可能になりました。

日本研究センターは、日本研究を支援する補助金を毎年交付しています。日本研究に携わっているミシガン大学教員を対象とし、補助金の授与額の範囲は500ドルから最高30,000ドルまでです。2005年夏季を含む2005—2006年度の補助金に対する申請書の提出期日は、2005年3月8日です。http://www/umichi.edu/~iinet/cjs/funding/faculty.htmlをご覧ください。

現在申請可能な2005—2006年度学生奨学金プログラム

以下の奨学金プログラムに関する詳細につきましては、CJSウェブサイトの奨学金情報ページ、http://www/umichi.edu/~iinet/cjs/funding/students.html を参照してください。

米国教育省によりタイトルVI（高等教育法第VI篇）の下に資金調達される**外国語並びに地域研究（FLAS）奨学金は、**近代言語研究を支援するために競合ベースで授与されます。この奨学金の申請書の提出期日は、2005年2月1日です。

CJSは、日本に焦点を当てた研究をするミシガン大学博士課程およびプロフェッショナル・スクールの学生、ならびにCJSの修士課程、修士・MBA、修士・J.D.の学生に対し、**CJS 基金奨学金と同窓会奨学金**を競合ベースで授与します。申請書の提出期日は、2005年2月1日です。これらの奨学金は、センターの基金と同窓会からの寛大な寄付によりそれぞれ実現されます。申請書の提出期日は、2005年2月1日です。

ラッカム・ブロック奨学金は、CJSの修士課程の学生を対象に、年次ベースで授与されます。申請書の提出期日は、2005年2月1日です。

CJS学会参加旅費補助金（トラベルグラント）は、日本研究を専門とするミシガン大の大学院生が、米国内あるいは海外の学会に出席し、論文を発表したり、パネルの座長、討論参加者、委員などを務める際に利用可能です。アジア学会（AAS）の就職面接などキャリア開拓のために学会に出席する学生も、申請することができます。申込み期日は毎年、11月30日、1月31日、3月31日の3回です。

奨学金プログラムに関する情報は、http://www/umichi.edu/~iinet/cjs/funding/students.html から入手できます。

2004—2005年度CJS学生奨学金

大学院生向け奨学金の受賞者は下記の通りです。

学年度FLAS奨学金：

ピーター・アレックス・ベイツ（ALC博士課程）、**アン・クラップケービッチ**（CJS修士課程）、**トラビス・フレミング**（CJS修士課程）、**ヘザー・リトルフィールド**（CJS修士課程新入）、**ピーター・シャピンスキー**（歴史学博士課程）。（FLAS奨学金はすべて、米国教育省タイトルVIプログラムからの資金調達によって実現されました。）

CJS同窓会奨学金：

有賀理（経済学博士課程）、**猿谷弘江**（社会学博士課程）。

CJS基金奨学金：

マーニー・アンダーソン（歴史学博士課程）、**ジェニファー・アンドリュース**（CJS修士課程新入）、**マリー・ケンドル・ブラウン**（高等教育学博士課程）、**ニール・ハリソン**（CJS修士・MBA）、**ジョシュ・アイゼンマン**（CJS修士課程新入）、**有賀理**（経済学博士課程）、**レオン・ブラウン**（政治学博士課程）、**シャン・チバス**（CJS修士課程新入）、**朴澤泰男**（教育学博士課程）、**ケリー・ローウィル**（歴史学博士課程）、**及部奈津**（美術史学博士課程）、**齊藤弘久**（社会学博士課程）、**猿谷弘江**（社会学博士課程）、**ジェレミー・シュワルツ**（法学博士課程）。

グッドマン奨学金：

ジョシュワ・マクブライド（CJS修士課程）。

イトウ奨学金：

マイケル・アーノルド（CJS修士課程）。

メロン財団「プライズ」賞奨学金：

ジェニファー・アンドリュース（CJS修士課程新入）、**金瑾暎**（キム・クンヨン）（人類学・歴史学博士課程）。

ラッカム・ブロック奨学金：

ノリコ・ヤマグチ（CJS修士課程新入）、**リエン・ヨン**（CJS修士課程新入）。

夏期FLAS 奨学金：

マリー・ケンドル・ブラウン（高等教育学博士課程）、**トラビス・フレミング**（CJS修士・JD）、**ニール・ハリソン**（CJS修士・MBA）。

お知らせ

2004年夏、建設工事の最中のCJSのスタッフ

CJSとCJS出版会が移転しました

CJSメイン・オフィスとCJS出版会は、長年の待機の末、そろって新しいホームを得ました。CJSメイン・オフィスは、ミシガン大学の中国研究センター（CCS）の隣、コリア研究プログラム（KSP）のホール向かい側に居を構え、両機関とのより密接な協力関係の促進を図ります。唯一の変更は、CJSの連絡先の号室が3640号室になったことです。

CJS出版会は、総編集長による記事に述べられているとおり、コーナー・ハウスからフリーズ・ビルディングへの引越しをこの夏に終えました。CJS出版会は、郵便用住所ばかりか、電話番号とファクシミリ番号までもが新しくなりました。ご注意ください。

Center for Japanese Studies
Publications Program
University of Michigan
1085 Frieze Building
105 S. State Street
Ann Arbor, MI 48109-1285

電話番号：(734) 647-8885
ファクシミリ番号：(734) 647-8886

フリーズ図書館／ラウンジがオープンしました

ミシガン大学の中国研究センター（CCS）、コリア研究プログラム（KSP）、CJSならびにアジア言語文化学部は、教員、大学院生、およびスタッフのために、ラウンジ／図書館エリアを新しく設置しました。この共有スペースは、セミナー、会議、集いに利用されることが意図されています。ラウンジは、フリーズ・ビルディングの1076号室で、9月10日のオープニング・レセプションによってオープンしました。このスペースおよびカードでのアクセス方法に関する詳細につきましては、CJSまで umcjs@umichi.edu にご連絡ください。

CJSのウェブサイトが新しくなりました

CJSの元プログラム・アソシエートの**エイミー・キャリー**は、CJS離職前にウェブサイト・デベロッパと何ヶ月も協力し、アクセスのより容易な新しいデザインのウェブサイトを開発しました。新しいウェブサイトは、更新や追加が週次ベースで行われます。CJSのウェブサイト、http://www.umichi.edu/~iinet/cjs をぜひご覧ください。

CJSが日本国外務大臣賞を受賞しました

日米関係150周年にあたり、川口順子外務大臣は、日本国外務大臣賞の受賞者の一つに日本研究センターを選出しました。

ジェニファー・ロバートソン教授、CJSを代表し伊佐敷総領事から受賞する

広範囲にわたる背景、専門、組織的使命を代表する受賞者は、日米間の友好、交流、相互理解の促進に卓越した貢献を示したことを基準に、選出されました。川口大臣からの賞は、受賞者の長年の努力と改善に対して日本政府からの敬意と謝意が表明されたことを意味します。

6月17日、CJSは、オハイオ州立大学政治学部の**ブラッドリー・リチャードソン**名誉教授、ミシガン州立大学の遠藤睦子日本語学準教授、デトロイト日本商工会と共に、**伊佐敷眞**一総領事からこの賞を拝受しました。

CJSは新しいスタッフ・メンバーを迎えました

エイミー・キャリーの離職により、2003年12月、**ジェーン・オザニッチ**がCJSのプログラム・アソシエートとして採用されました。現職の前はミシガン州立大学の米国教育省タイトルVI言語学資料センターのアソシエート・ディレクターを務め、その前は日本の三重大学教育学部の客員教授でした。英語教授法（TESOL）で修士号を取得しており、米国と日本の両国で幅広い教職経験を備えています。

ジュリー・ワインダーは、2004年2月にパートタイムの学務アシスタントとしてCJSに勤務し始めました。ボストン大学から社会福祉学で修士号、ボストン・カレッジから哲学で学士号を取得しています。また、東京に3年間住み、日本の言語と文化を学び、東京大学の大学院生に英語を教えました。国際教育と学務サービスの分野で5年間の勤務経験があります。

ミシガン大学アジア図書館旅費補助金申請受付中

CJSでは、他の機関の日本研究者がミシガン大学アジア図書館を利用する際の交通費、宿泊費、食費、コピー代に対し、最高700ドルの補助金を提供しています。この補助金の有効期間は2004年7月1日から2005年6月30日までです。同図書館に関する詳細情報につきましては、ウェブサイト、http://www.lib.umichi.edu/asia を参照するか、図書館アシスタントに電話（(734) 764-0406）で連絡してください。

この補助金に関心のある方は、申請書、研究内容とアジア図書館利用を希望する理由（250ワード以内）、使用したいアジア図書館リソースのリスト、最新の履歴書、見積もり予算、旅行日程案を電子メール(umcjs@umich.edu)か郵便（下記の宛先へ）でCJSまでご送付ください。

Asia Library Travel Grants
Center for Japanese Studies
Suite 3640, 1080 S. University
The University of Michigan
Ann Arbor, MI 48109-1106

CJS出版会が移転しました

第1ページから続く

談は私の手を離れてしまっていたのです！そこで私は白状して罰を受けることにしました。

10年ほど前のある日、私が自分のオフィスの中で座っていた時、80歳を過ぎていると思われる男性がオフィスのドアをノックしました。彼は、「建物の中を一巡してよろしいですか？この建物は私がミシガン大学の学生だった当時、私の学生寮だったんです」と言いました。私はコーナー・ハウスが最初どのように始まったのかは知りませんが、1930年代には学生寮で、その後1950年代にはレストランだったことは知っています。（私たちは地下の精肉貯蔵庫に本を保管し、「最高の家族の晩餐」などと言っていたものです。プレースマットやマッチは今でもあります。）私が1982年に赴任した頃、コーナー・ハウスはシャープ姉妹が所有していました。彼女たちは建物の上の階に住み、下の階と裏側を大学に賃貸借していました。それから何年か経ち、彼女たちは最終的に建物を大学に売却し、引っ越していきました。

古い壁紙の模様、ユニークな柄のカーペット、私のオフィスの暖炉などがなくなったことは寂しく思っています。でも、在庫を保管していた汚い地下室と決別できたことには寂しさはありません。こうした古い建物は大学というものが常に印刷・出版プログラムを行ってきた場所であり、学術出版に携わる人々のほとんどが古い建物について何らかの逸話を語れるように思えます。まさしく私の話のように。

というわけで、私たちの新住所は1085 Frieze Building, 105 S. State St., Ann Arbor, MI 48109-1285、電話：(734) 647-8885、ファクシミリ番号：(734) 647-8886です。通りの向かい側に引っ越しただけですが、何から何まで変わりました。

最近の出版物は、**ヴィクトリア・ウェストン**著の『*Japanese Painting and National Identity: Okakura Tenshin and His Circle*（日本画と国のアイデンティティ：岡倉天心と彼の仲間達）』（ISBN 1-929280-17-3、クロス装丁、65ドル）と**ローレンス・E・マルソー**著の『*Takebe Ayatari: Bunjin Bohemian in Early Modern Japan*（建部綾足：近代日本初期の文人ボヘミアン）』（ISBN-1-929280-04-1、クロス装丁、69ドル）の二つです。両著とも四色刷り、挿絵がふんだんです。また、**スザンナ・フェスラー**著の『*Musashino in Tuscany: Japanese Overseas Travel Literature, 1860-1912*（トスカーナの武蔵野：日本人の海外旅行記、1860—1912年）』が、今秋に出版される予定です。フェスラー教授は、明治時代の海外旅行記に見受けられる詩歌的な心像と引喩を説明し、日本人が西洋に旅行をした時に彼らが書き留めた心像は、日本人旅行者が発見した場所ではなく、西洋の名声と学問において既に存在していた場所に関連する傾向にあった、と示しています。さらに、圧倒的に自然に基づく日本人の日本国内旅行とは異なり、日本人の海外旅行の心像はしばしば人造の世界に関連していたことも、示しています。

当センターの全出版物の説明、または注文の手続きおよび注文書のダウンロードにつきましては、CJSのウェブサイトから「Publications」をクリックしてください。

日本研究センター出版会総編集長
ブルース・ウィロビー
(Bruce Willoughby)

9月

10日 オープンハウス：CJS、CCS、KSP、ALCの教員および大学院生のための新しいフリーズ図書館／ラウンジのオープンハウス。午後3時　5時、フリーズ・ビルディング1076号室

15日 レセプション：トヨタ招聘客員教授の牟田和恵教授の歓迎レセプション。午後4時半　6時、インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー。

16日 講演*：「Democracy without Competition in Japan: Opposition Failure in a One-Party Dominant State（日本における競争なき民主主義：一党支配国家における野党の失敗）」カリフォルニア大学デイヴィス校政治学助教授教授イーサン・シュナイダー。

17日 無料映画上映：**『ふるさと』（86分）。

23日 講演*：「Japan Inc. at Its Turning Point Strategy Beyond Technology（転換期に立つジャパン・インク 技術よりも戦略）」セイコーオーストラリア取締役社長内藤昭男。

24日 無料映画上映：**『残菊物語』（142分）。

30日 講演*：「日本語で言うこと、言わないこと」ミシガン州立大学日本語教育・言語学準教授ハドソン遠藤陸子。

10月

1日 無料映画上映：**『元禄忠臣蔵　前・後篇』（217分）。

1・2日 映画：『Sumo East and West』。アフタヌーン・マチネー。午後2時、アン・アーバーのミシガン・シアター。

7日 講演*：「On Teaching Reponses to Atrocity: Hiroshima and the Holocaust（残虐行為に対する対応を教えるにあたり：広島およびホロコースト）」カリフォルニア大学バークレー校日本文学教授アラン・タンズマン。

8日 無料映画上映：**『わが恋は燃えぬ』（83分）。

11日 質疑応答（Q&A）：舞踏家の笠井叡インタビュー。午後7時、ソーシャルワークビル1636号室。

12日 舞踏ワークショップ：笠井叡指導の公開舞踏ワークショップ。午後2時　4時、アン・アーバーのダンス・ギャラリー・スタジオ。

13日 公演／レセプション：笠井叡のソロ舞踏パフォーマンス『花粉革命』。午後8時、パワー・センター。公演後、CJS主催のパブリック・レセプション。ミシガン・リーグのヴァンデンバーグ・ルーム。

14日 講演*：「The Kyoto Model of Entrepreneurship and Innovation: Comparative Lessons?（起業家精神と革新の京都モデル：比較教訓？）」デポール大学政治学助教授キャスリン・イバタ=アレンズ。

15日 無料映画上映：**『西鶴一代女』（133分）。

18日 書籍討論会：東洋大学日本文学助教授マシュー・カール・ストレッカー率いる『象の消滅』に関するブック・クラブ討論会。午後7時―9時、アン・アーバー地区図書館メイン・ブランチ。

20―23日 演劇公演：『象の消滅』。毎晩午後8時開演、パワーハウス。

22日 無料映画上映：**『祇園の姉妹』（68分）。

24日 オープン・ハウス：日本家庭健康プログラムの第10回年次オープンハウス。子どもの活動、軽い飲食物、プレゼント、健康情報、その他。詳細はエイミー・サンタムールに連絡（(734) 998-7122；astamour@umich.edu）。

28日 講演*：「Rescuing the Past from History: Commemorative Movements in Late Tokugawa Japan（過去から歴史を救い出す：近世後期における記念運動）」ジョージ・メーソン大学歴史学部助教授ブライアン・プラット。

29日 無料映画上映：**『雨月物語』（96分）。

11月

4日 講演*：「Japanese POWs of World War Two（第二次世界大戦の日本人捕虜）」ウルリツ・ストラウス（元沖縄総領事・フィリピン担当ディレクター・国防大学教授）。

5日 無料映画上映：**『山椒大夫』（125分）。

11日 講演*：「Sexual Harassment in Japan: Progress and Problems（日本におけるセクハラ：進歩と問題）」CJSトヨタ招聘客員教授牟田和恵（社会学）。

12日 無料映画上映：**『浪華悲歌』（83分）。

18日 講演*：「Environmental Sociology in Japan: The Turning Point for the Second Stage（社会学、環境社会学、社会運動、社会紛争、社会変動）」東北大学文学研究科教授長谷川公一。

19日 無料映画上映：**『赤線地帯』（85分）。

12月

2日 講演*：「Three Logics of Welfare Politics in Japan（日本における福祉政策の三つの論理）」ハーバード大学政治学部助教授マルガリータ・エステベス・アベ。

1月

8日 特別イベント：御餅つき。午後1時　4時、インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー。

13日 講演*：「In the Name of Reform: Christians and Buddhists in the Meiji Period（矯風のために：明治期のキリスト教徒と仏教徒を中心に）」ウエイン州立大学大学院歴史学部助教授エリザベス・A・ドーン。

20日 講演*：「Naturalist Literature and Social Imaginaries（自然主義文学と社会の発想様式）」イエール大学東アジア言語・文学科日本文学助教授クリストファー・ヒル。

27日 講演*：「Japanese Local Currency Movements and Globalization（日本の現地通貨運動とグローバリゼーション）」カリフォルニア大学アーヴァイン校東アジア言語・文学部準教授ジェイムズ・フジイ。

*講演はすべて、別途通知のない限り、ソーシャルワークビル1636号室にて正午に開始されます。

**映画上映はすべて、ローチ・ホールのアスクウィズ・オーディトリアムにて午後7時に開始されます。映画はすべて、別途通知のない限り、英語字幕付き日本語、英語吹き替え、または解説によるものです。

講義および映画上映は、一部米国教育省からのタイトルVI助成金により、実現しました。最新情報につきましては、CJSイベント・カレンダー、*http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/calendar.html*をご覧ください。

近況をお知らせ下さい

CJSでは、教員、学生、卒業生の皆さんからの近況のご投稿をお待ちしています。引越しされた方、引越し予定のある方、CJSニュースレターを定期的に受理されていない方は、電子メール(umcjs@umich.edu)、または右記の住所まで郵便にて、ご連絡ください。

DENSHO
伝書

ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 3640
Ann Arbor, MI 48109-1106
電話：(734) 764-6307
ファクシミリ：(734) 936-2948
電子メール：umcjs@umich.edu
ウェブサイト：http://www.umich.edu/~iinet/cjs/

所長：マーク・D・ウエスト
アドミニストレーター：深澤ゆり
プログラム・アソシエート：ジェーン・オザニッチ
学務アシスタント：ジュリー・A・ワインダー
アウトリーチ・コーディネーター：G・P・ウィットビン
オフィス・アシスタント：サンドラ・モラスキー

ミシガン大学日本研究センター出版会
1085 Frieze Building
105 S. State Street
Ann Arbor, MI 48109-1285
電話：(734) 647-8885
ファクシミリ番号：(734) 647-8886
電子メール：cjspubs@umich.edu
ウェブサイト：http://www.umich.edu/~iinet/cjs/publications

出版会ディレクター：殿村ひとみ
総編集長：ブルース・ウィロビー

CJS執行委員会：江森祥子、ジェニファー・ロバートソン、ジョン・キャンベル、メアリベス・グレービル（職権上）、仁木賢司（職権上）、エスペランザ・ラミレズ=クリステンセン、マーク・D・ウエスト。

Regents of the University of Michigan: David A. Brandon, Laurence B. Deitch, Olivia P. Maynard, Rebecca McGowan, Andrea Fischer Newman, Andrew C. Richner, S. Martin Taylor, Katherine E. White, Mary Sue Coleman (ex officio).

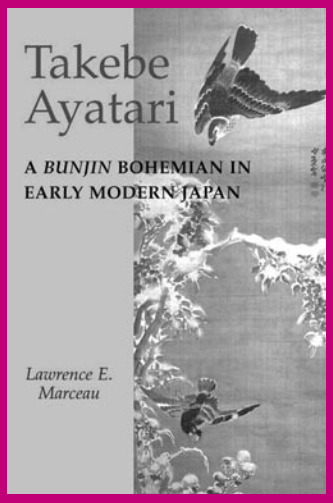
The University of Michigan, an equal opportunity/affirmative action employer, complies with all applicable federal and state laws regarding non-discrimination and affirmative action, including Title IX of the Education Amendments of 1972 and Section 504 of the Rehabilitation Act of 1973. The University of Michigan is committed to a policy of non-discrimination and equal opportunity for all persons regardless of race, sex, color, religion, creed, national origin or ancestry, age, marital status, sexual orientation, -disability, or Vietnam-era veteran status in employment, educational programs and activities, and admissions. Inquiries or complaints may be addressed to the University's Director of Affirmative Action and Title IX/Section 504 Coordinator, 4005 Wolverine Tower, Ann Arbor, MI 48109-1281. 734.763.0235, TDD 734.647.1388. For other University of Michigan information, call 734.764.1817.

「伝書」編集人：ジェーン・オザニッチ
「伝書」翻訳：村上まどか
「伝書」デザイン：ワーグナー・デザイン
「伝書」印刷：プリンテック

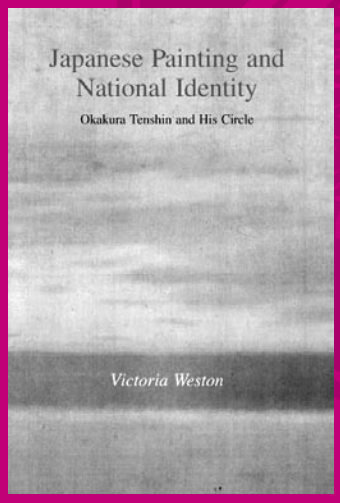
ミシガン大学
日本研究センター

2004年秋

日本研究センター出版会から現在発売中の新刊です



『*Takebe Ayatari: Bunjin Bohemian in Early Modern Japan*（建部綾足：近代日本初期の文人ボヘミアン）』
ローレンス・E・マルソー著



『*Japanese Painting and National Identity: Okakura Tenshin and His Circle*（日本画と国のアイデンティティ：岡倉天心と彼の仲間達）』
ヴィクトリア・ウェストン著

DENSHO
伝書

Center for Japanese Studies
University of Michigan
Suite 3640, 1080 S. University
Ann Arbor, MI 48109-1106